

【松田聖子】試論

— 歌謡曲の色彩 —

1. 作詞／三浦徳子
2. 作曲／財津和夫

堀 家 敬 嗣

An Essay on the Presence of MATSUDA Seiko
— with the colorful words in her song lyrics —

Ⅰ-2

HORIKE Yoshitsugu

(Received September 27, 2013)

Ⅰ-2-1. <チェリーブラッサム>

[君]、もはや透明な硝子板ではない鏡、光を遮断し適度に反射する金属の粒子をその背後に蒸着させたこの平面を介して、いまや量かされた[わたし]の輪郭のうちに充溢する金属質の曇、銅の、錫の、銀の色、あの鈍色に滲む“わたし”と出会ってしまった18歳の[私]は、けれどなお、その[心から]、[痛いほど]に[あなた]を[愛してる]ことを知り、まさに[心]で[とても好きよ好きよ]と[答え]る。かつて[もぎたて]の果実そのものだった[青い風]、これを[切っ]て[私の恋]を[走]らせる推進力としての[南の風]、そして果実も花葉も枯らし、艶やかな彩りを喪失した秋の風。<チェリーブラッサム>にあっては、ついに[激しい風吹かれ]ようとも、歌詞の言葉の語り手は[今愛のため]とこれを覚悟する。

こうして[何もかもめざめてく新しい私]が生まれる。<チェリーブラッサム>とは、新しい春が訪れるその都度、去年と同じ桜の樹木の枝が芽吹き、新しい花を咲かせるように、<裸足の季節>に始まった一定の歴史をひとまず締め括り、次の春として準備される新しい時間を生きなおすための、ある態度の表明である。<裸足の季節>においては[渚をすべ]っていた[白いヨットの影]、いまやこの[走り出した船の後]に[白い波]が[踊って]いる。[恋のモスグリーン]に染まる[渚]を背景に[うつ向き加減]だったあの[Little Rose]、<青い珊瑚礁>の[花びら]は、[胸に抱いた愛の花]となる。<風は秋色>で[冷たい秋]に迎えた[ひとりぼっちの夕暮れ]、その[夕日は今]、[夜のために／水平線]へと[沈む]。ひとつの季節を回収し、新しい季節の到来を準備する潜在性の全体であるこの漆黒の闇は、あの[もぎたて]の果実でもあった[青い空]を無限の宇宙に向けて吸い上げる。一度はそこで実現されたあらゆる記述は払拭され、[空]は次なる[未来の夢]を[描いてゆく]ための可能性の平面、すなわち[キャンパス]へと更新される。夜の帳の色とは、要するに黒板のそれにほかならない。

言葉の彩りをめぐって、〈チェリーブラッサム〉の表題をもって果実や花葉といった従来の植物的な領域への参照を補強する一方で、今度は動物的な領域をも参照の体系に採用する歌詞にあつては、更新された「青い空」に「つばめが飛ぶ」。かつて〈裸足の季節〉では、太陽のもと目映くきらめく海面のうえに映し込まれた厚みのない「影」ばかりか、水平線に屹立する「ヨット」それ自体までが暗闇の平板さをもって奥行きを欠く「影」となり、水面の眩しさに瞳孔を窄める「私」の視線に、その目映さの陰画としての「影」の軌跡を、「渚をすべ」る運動だけを「白」さとして焼きつけた。こうして「走り出した船の後」で「踊」る〈チェリーブラッサム〉の「白い波」は、宙に舞って跳ねるその飛沫を「つばめ」のかたちへと変換される。

鋭く風を切り裂くその翼をもって「渚をすべ」る「白いヨット」の帆「影」の一変奏となり、また「南の風に乗」り、「青い風切って走」る「私の恋」の一変奏ともなる「つばめ」。ここで「青い空」を飛翔する「つばめ」は、「影」が逆光の平面に綴ったあの航跡、「渚をすべ」る「ヨット」の残像としてのその平面的な光跡を、宇宙まで無媒介的に届く「青い空」へと解放して立体化し、ここに「新しい私」が「自由な線自由な色」を「描いてゆく」権利を保証する。

なるほど、たとえこれが「ヨット」であれ、「船」であれ、その航跡は海面上に拘束され、これが描線を展開させる方向を平面的に限定する。しかしながら、このように「自由な線自由な色」でもってそれを「描いてゆく」ことができない不自由さを「私」が甘受していたとすれば、それは、彼女が常にその行方に「手を振るあなた」を見定め、「走り出した船」すなわち彼女の「愛」が「ただあなたへと続いている」からである。こうして彼女の視線が「あなた」のことをまなざすのは、あの海の呪縛から免れて「青い空」へと自身を解放し、飛翔するためであるにちがいない。そしてこの、「あなたとの約束が叶うのは明日」なのだ。遠くない将来に実現の瞬間が到来することを約束し、無限に開かれた宇宙の潜在性へと「私」をつなぐ一本の糸。「太陽を宇宙の他の部分に結びつけている糸は、たしかにきわめて細い。それにしても、この糸をつたってこそ、われわれの生きていくこの世界の最も微細な部分にまで、宇宙全体に内在する持続が伝わってくるのである」¹。海のうえに描出される航跡、水面の眩しさに瞳孔を窄める「私」の視線に「渚をすべ」る運動だけを「白」さとして焼きつけた、その目映さの陰画としての「影」の軌跡とは、おそらくそうしたものである。「明日」に見込まれた「約束」の実現とともに、あるいはむしろこの実現そのものとして、「何もかもめざめてく新しい私」がそこにいるだろう。ここに至ってようやく、彼女は「あなた」と「二人」で「自由な線自由な色」を「描いてゆく」のである。

待ち遠しい「明日」に「あなたとの約束が叶う」だろうことの未然性は、けれどまた、その実現をめぐってある不確実性を、つまり一定の不透明性をともなわずにはいない。「つばめが飛ぶ青い空」の、だがあくまでも「未来の夢」であることを告白する「私」にとって、「明日」に「約束が叶う」そのためには、なにをおいてもまず「夜」が明けなければならない。〈チェリーブラッサム〉、「未来の夢」のこのつばみは、翌朝の陽射しを浴びてやっと花開く時機と思しき具合に重く膨らんでいる。ついに「明日」、長らく待ちわびた実現の機会が訪れたものとして、「胸に抱いた愛の花」を差し出したとき、しかし「あなた」がこれを拒むことの可能性に、彼女は一抹の不安を覚えてもいる。それでもなお、彼女は眩く。きつと「あなた」はそれを「受けとめてくれるでしょう」。だからこそ、なにをおいてもまず「夜」は明けなければならないのである。そして明けるべき「夜のため」に、「夕日は今」まさに「水平線」へと、あの海へと「沈む」のである。

穏やかな陽射しに萌え、新鮮な風に守られた生硬なつばみは、いつしかほんのりと色づき、

ここまで膨らんできた。まるで陽光の残り香のように、そこにわずかに色を移して〔夕日は今〕まさに〔水平線〕へと、あの海へと〔沈〕もうとしている。〔白い〕波頭を紡ぐ目映いきらめきの陰画としての航跡も、夕暮れに染まる底知れない海の奥深さのうちにとうに回収されてしまった。こうして、瞬くあいだにあの〔水平線〕の向こう側に〔夕日〕が〔沈〕みきってしまうときには、もはや海それ自体さえが、〔夜〕へと、新しい季節の到来を準備する潜在性の全体であるこの漆黒の闇へと、そこで実現されたあらゆる記述を払拭する無限の宇宙へと吸い上げられずにはいない。〔青い空〕が海のうちに墜落し尽くさないように、もしくは海が〔青い空〕のうちに揮発し尽くさないように、かろうじて一方を他方から画していた〔水平線〕を、黒板のものにほかならない夜の帳の色が接収する。

海の深奥に呑み込まれ、空の清澄に包み込まれ、いずれ〔水平線〕の霧散したそこにはただ、とうに海のものでも空のものでもないような漆黒の闇が、宇宙へと無媒介的に延長される潜在性の全体が、すなわち〔夜〕が現われる。だからおそらく、〔水平線〕もまた、無限に開かれた宇宙の潜在性へと〔私〕をつなぎつつ〔明日〕の実現を約束する、あの一本の糸なのである。〔夕日〕がその向こう側に〔沈〕みきってしまうやいなや、海の深奥に呑み込まれ、空の清澄に包み込まれ、それは消失する。ただしこの消失は、ここに〔沈む〕太陽の再び昇ることを、新しい季節の到来を、〔約束〕された〔明日〕の実現を待機し、準備するその予兆となる。〔水平線〕とは、こうして〔夜〕の闇を跨ぐごとに更新される〔自由な線〕のひとつのかたちなのである。

瞬くあいだに、あの〔水平線〕の向こう側に〔夕日〕は〔沈〕みきってしまうだろう。海さえが〔夜〕へと、新しい季節の到来を準備する潜在性の全体であるこの漆黒の闇へと、そこで実現されたあらゆる記述を払拭する無限の宇宙へと吸い上げられずにはいないその寸前で、まさに〔夕日は今夜のために／水平線沈〕もうとしている。〔明日〕を準備し、その予兆となるこの光景、無限の宇宙へと吸収されるまでかろうじて海を空から画し、映える〔夕日〕の色をもって球状の表面を維持するこの固体とは、まぎれもなく〈チェリーブラスサム〉そのものであるだろう。陽光の懐かしい残り香のように、そこにわずかに色を移して〔夕日〕は〔沈〕む。生硬だったつぼみの次第に丸みを帯びつつある形態は、さらにそれが〔夕日〕の色に染められることによって、翌朝の陽射しのもと花開く適宜と思しき具合に重く膨らんだことの、つまりは〔明日〕、長らく待ちわびた実現の機会が訪れたものとして〔胸に抱いた愛の花〕となることの指標となる。飽くことなく太陽の周囲を巡回しながら、日ごと宇宙に異なる潜在性の花を咲かせるための大地となり、風となり、水となり、あるいは種子となり、幹となり、枝葉となる地球、そして日の終わりには色づき、〔夜〕の沈黙に耐えて次の朝を待つこのつぼみ。

1-2-2. 〈夏の扉〉

〈夏の扉〉は、松田聖子のシングル曲において三浦徳子が作詞を担当した最後のシングル曲となった。このアイドル歌手のデビュー以来、1年以上にわたり彼女の存在性を彩ってきた作詞家の言葉は、にもかかわらずここでは、アイドル歌手として色づき始めたひとりの女性がたどった四季の足跡をすべて拭い去り、その色調をいったん白紙に戻すかのように、一定の色彩を安易に参照させるいかなる語句も採用していない。彼女の世間的な認知に大きく加担したこの作詞家は、次の作詞家の言葉に彼女を託すにあたって自身の言葉を脱色し、すでに広く流通したこのアイドル歌手の存在性を完全には無色化できないまでも、できる限りその色合いを素

材それ自体のものへ還元しようと試みる。あの〔夜〕への、新しい季節の到来を準備する潜在性の全体である漆黒の闇への、ひとたび実現されたあらゆる記述を払拭する無限の宇宙への解放が準備する〔明日〕のかたち、たとえそれがどのようなものであれ、これに積極的に干渉することを〈夏の扉〉の作詞家は潔しとしない。いわばそれは、この職業をめぐって行使された、ひとつの倫理的な態度であるだろう。

とはいうものの、とうに賽は投げられてしまった。「去年まで（…）堅実な家庭の本物の女子高生だった」²存在は、いまや容易に松田聖子として社会に同定されるひとりのアイドル歌手になってしまった。「アイドル冬の時代かと思われた一九八〇年代に、フリルのついた白いドレスを着てわざとらしく笑う」³この「十八歳の歌手が登場」⁴したことは、もはや歌詞の言葉の脱色をもってしてもこれを撤回できず、またその漂白をもってしても世間がこれを放念しようもないほどの、ある決定的な意義を、日本の芸能に関わる歴史のうちに穿った。「松田聖子はアイドルを演じた。それが、新しい、何かだった。アイドルを演じる過程そのものを提示することで、松田聖子は「新しいアイドル」になった」⁵。おそらく「松田聖子以外には誰も「一九八〇年代のアイドル像」をイメージできなかったのだ。彼女だけが確信していた」⁶。

なるほど、「そういった時代の要請を一身に引き受けた聖子を、女性ファンたちも歓迎して、当初は「聖子ちゃんカット」に代表されるように形態の模倣をしてい」⁷た。それどころか、いまやその背中は後進の女性アイドルにとって追いつき追い越すべき目標となり、「彼女を中心に、そこからの偏差の分布として、のちの女性アイドルたちの存在性は規定される」⁸ような零度記号として、つまり絶対的な空白として機能するに及ぶ。好むと好まざるとにかかわらず、たとえば「八二年にデビューした新人たちは、みな最初は松田聖子のコピーだった」⁹。ここに至って、それまで社会に対して松田聖子の同一性を保証してきた特徴的な髪型に頑迷に固執することは、女性アイドル歌手としての彼女の特権性を希薄化し、氾濫する模倣者のなかに彼女の存在性を埋没させかねない。こうした懸念のゆえか、「いくつかのエピソードから明らかかなように、この時期の松田聖子は、髪型や衣装については強く主張し」¹⁰てもいる。その存在性がすでに絶対的な空白としての零度記号となった限りにおいて、この同一性の放棄がそれを微塵たりとも揺るがすことはないだろう。

たとえ〔髪を切った私〕が〔違う女みたい〕に見えようとも、きっと彼女は松田聖子でありえた。「つまり、松田聖子は顔ではなく、まず声で人々を惹き付けたのだ。人々は顔ではなく、まず声として松田聖子を認識し、そこに惹かれた」¹¹。平準化され、均質化しつつある存立平面上に、既成の同一性の抹消とその刷新をもって突如として生じる陥没の一地点は、むしろそこに特権性を回復し、彼女の存在性を補強するものとさえ思われた。実際、いずれ彼女は髪を切る。ただし、松田聖子にはまだその決心がつかない。それは〔“ためらい”の／ヴェールの向こう〕で彼女を〔手招き〕して待っている。〈夏の扉〉の歌詞の言葉は、〔髪を切った私〕のその〔違う女みたい〕なイメージを先取りし、やがて実現される彼女の変貌を予言する。

なるほど、〔“ためらい”の／ヴェールの向こう〕にいるのはまぎれもなく〔あなた〕である。にもかかわらず、それは〔いつも〕のことだと歌詞の言葉は教える。実現の可能性をこの〔ヴェール〕越しに仄めかしながらもなお、いつまでも潜在したままに留まる〔あなた〕の存在性。換言すれば、〔あなた〕のことを覆い隠す〔ヴェール〕を外したとたんに、もはや〔あなた〕はそこにはいないわけだ。あるいは、そこにいる〔あなた〕とは、とうに〔あなた〕ではない誰かであるだろう。〔あなた〕が〔あなた〕たることの同一性を〔あなた〕に対して保証する構成要素、その存在性にとっての必要条件である〔“ためらい”の／ヴェール〕の撤去は、〔あな

た]の存在性を別のなにかへと変質させずにはいない。

したがって、[髪を切]ることを[ためら]うとき、そこには[違う女]となることへの躊躇が絶えずつきまとう。そしてこの[髪を切った私]について、[“ためらい”の/ヴェール]が濾過した此岸に[違う女みたい]な潜在性が実現される一方で、その彼岸には依然として[綺麗]が潜在し、[ほんとは/言っただけ]という失望のうちに実現の機会を摘まれてしまう。[“ためらい”の/ヴェール]を、つまりは[夏の扉]をひとたび[開けて]、歌詞の言葉の語り手が[どこか連れて行って]もらうその行方には、ただ[違う女みたい]な[私]の姿ばかりが出来し、[綺麗]な[私]の姿は依然として[ヴェールの向こう]に隠匿され続ける。

というのも、ここで[夏の扉]とは、[あなた]や[私]が[開け]るものではなく、あくまでも[夏]それ自体が[開]くものであるからだ。[私をどこか連れて行って]もらうべく、たとえば[あなた]に強引に[夏の扉を開け]るよう要請したところで、おそらく[扉]は頑迷に[開]こうとしない。そうではなく、もっぱら[裸の二人]に対してのみ、自動的に[夏は扉を開け]る。[あなた]がどれほど果敢にその開放を試みようとも失敗し、ただ[夏]それ自体ばかりが[開]くことの可能なこの[夏の扉]とは、[私]にとっては一種の[扉]の騙し絵であり、鏡面に映り込んだ[扉]の像であるかもしれない。

してみると、[夏の扉]すなわち[“ためらい”のヴェールの向こう]にいる[あなた]とは、まぎれもなく[髪を切った私]のことであり、これを[違う女みたいと]感じるのもまた、やはりこの[私]なのである。彼女が[ヴェールの向こう]に見透かし、[夏の扉]の彼岸に期待した[綺麗]な自分と、この[ヴェール]が跳ね返し、[夏の扉]の此岸に出来た[違う女みたい]な自分。[あなた]に[綺麗だよとほんとは/言っただけ]くて[髪を切った私]の注力がどれほどのものであれ、これに微動だにしない[夏の扉]に跳ね返された彼女の姿は、[違う女]たらざるをえない。ここで自らに期待する[綺麗]のかたちをあらかじめ[ヴェールの向こう]に、この[夏の扉を開け]た先に投影している彼女にとっては、それは金属質の曇、銅の、錫の、銀の色が充溢する[私]の輪郭のうちに、曖昧な鈍色に滲んだ冴えない姿である。[私]が[髪を切]ることとは、これまでの[私]とは別のなにかになること、慣れ親しんだ[私]とは異質の新しい[私]になることにほかならない。その限りにおいて、[髪を切]る行為は、[私]のうちなる[違う女]の潜在性を実現する。

それでもなお、この行為は、[私]のうちに潜在する[綺麗]の理想的なかたちを遺漏なく実現するものでは必ずしもない。自らに期待する[綺麗]さのありようを[私]が詳細かつ鮮明に思い描くほど、[髪を切った私]におけるその実現は失調を繰り返す。実現された[髪を切った私]の姿の、[夏の扉]を隔てて浮かび上がる[綺麗]のかたちにあまりに似ていることが、互いのあいだの差異をよりいっそう際立てながら、もはや[違う女]となったことを否応なく享受させる。このように彼女は[ヴェール]の此岸に永遠に停留したまま、その彼岸へと足を踏み出し、歩みを進めることはないだろう。そこでは誰もが、[夏の扉を開けて/私をどこか連れてい]くことなどできないのである。

四方を鏡面に囲われ、鏡像が鏡像を無限に反映し合うように、こうして[開]かない[扉]に囲われ、いわば鏡のなかに閉じ込められた[私]には、ただし唯一、そこから逃れる方法が教示されてもいる。それは、[夏の扉]に向かって魔法の文句を、より厳密には魔法を解くための文句を唱えることである。〈夏の扉〉におけるサビの箇所を強烈に印象づけ、この楽曲の惹句ともなるような[フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!]のフレーズがそれである。この語句の響きに共鳴して鏡は割れ、これまで力尽くではけっして[開]こうとしなかった[夏

の扉] はたちどころに [開] く。ここで [フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!] の呪文を、あるいはむしろ祓詞を聞き届け、[扉を開け] るもの、それが [夏] である。この祓詞が反復されるその都度、[夏は扉を開けて/裸の二人] に [手招きを] し、彼らを [包んでくれる] のである。

[フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!] の祓詞を唱えることによって、[私] と [あなた] は [裸] のまま [夏] に [包] まれる。ここで [裸] になることとは、おそらく、単に [髪を切] ることばかりを意味しない。ましてそれは、[綺麗] な [私] の潜在性を実現することではありえない。[裸] になることとは、[私] が [私] であることの同一性に頓着せず、色づいた人称性を素材に本来の、生成りの状態にまで還元することである。だからこそ、[私] と [あなた] が [裸] のまま [夏] に [包] まれるそのためには、[髪を切った私] が、[綺麗] な自分の実現への固執を放棄したうえで、[違う女] へと生成した自身がそれとして甘受されなければならない。[フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!] の祓詞は、潜在したまま理想化された [綺麗] さへの諦念を音響的な持続へと変換し、表明する。このとき共鳴を介して鏡面に罅を走らせ、そのなかに浸透した持続に、併せて金属質の曇は剥離し、[私] の輪郭のうちに銅の、錫の、銀の色の充溢して曖昧な鈍色に滲んだ冴えない像は、ここに脆くも崩れ去る。

たとえ [髪を切った] ところで以前の自分からの切断をなんら被ったわけではなかった [私] は、祓詞の歌唱とともに、[ヴェールの向こう] へと突き抜けて [夏] の [手招き] のもと [どこかへ連れてい] かれ、それにとって代わって、真に新しい、真に [違う女] が誕生する。こうした過程を経てようやく、[綺麗] な [私] は実現されうるにちがいない。[フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!] の祓詞は、それが歌唱されるごとに [私] の存在性を刷新していく。[裸] の、生来の、生成りの、つまるところ [私] が [私] になる以前の [私]。この祓詞をもって存在性を初期化された [私] が獲得する資格ないし権利とは、だから潜在する [綺麗] さの理想的なかたちを叶えるための基盤、その素材となることである。

ここで [扉を開け] た [夏] に包容される [裸の二人] のあいだには、[私] の一語の発話と [あなた] の一語の発話をもって相対的に画される関係性は、いまのところまだ成立していない。言葉が、言表行為が [私] を [あなた] から隔て、[あなた] を [私] から隔てる。その段階に到達するまで、[開] くことが同時に [包] むこととして作動する [夏の扉] のもと、[二人] は [裸] であり続ける。たとえば [車が通りすぎて/二人を分けてゆく] とき、[私] と隔てられた [道の向こう側] で [あなた] が [何か叫んでる] のはそれゆえである。あるいはむしろ逆に、[あなた] が [何か叫んでる] からこそ、[夏] に [包] まれた [裸の二人] のあいだを [車が通りすぎ]、その此岸と彼岸とに [二人を分けてゆく] ののである。かつては [白いヨットの影] であり、また [つばめ] でもあったひとつの運動が、ある力が、ある速度が、ここでは [通りすぎ] る [車] となって、海と空を隔てた水平線のように [裸の二人] のあいだに鋭利な描線を切り込み、片方が [あなた] として [向こう側] へと分割される境界たる一本の [道] を敷設する。

こうしてあの ["ためらい" の/ヴェールの向こう] に追いやられ、[あなた] が [叫] ばずにはいない [嘘] のような ["好きだよ"] のフレーズとは、したがって、彼に固有の祓詞であるかもしれない。ひとたび [あなた] の声がこの語句を音響的な持続へと変換するならば、それは [私] における [フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!] と同等の効果を行使し、あれほど強固に閉ざされていたはずの [夏の扉] は [みんなが見てる目の前] でたちまち [開] く。だからおそらく、[ためらい] にせよ [好きだよ] にせよ、そこでこれらの語句を括る ["と

["]こそが、[あなた]を[私]から隔てる境界すなわち[夏の扉]であるにちがいない。この括弧は、均質な文字の羅列のなかに異質な水準を組み込み、これらに括られた言葉の存立平面が他のものと容易に馴染むものではないことを明瞭にする。〈夏の扉〉の歌詞の言葉の語り手は、どうにも解消できない居心地の悪さを[ためらい]や[好きだよ]の語句に覚えずにはいない。自身の安定した管理のもと、その声をもって音響的な持続へと変換できる文字の羅列のなかで、しかしこれらの語句ばかりは、その語り手による差配に必ずしも従順に応じるわけではない。それどころか、ある種の摩擦や軋轢にともなう異物感を伝えることによって、この操作を不安定にさえる。

ここで歌詞の言葉の語り手に伝わる異物感は、吃りとして露呈する。["と"]に括られること、それが吃りなのである。そしてこの吃りは、["と"]が括る[ためらい]や[好きだよ]の語句が、[ヴェールの向こう]に、[道の向こう側]に、もしくは[夏の扉]それ自体として、[あなた]を[私]から隔ててしまうことに由来する。[ヴェールの向こう]で、[道の向こう側]で、[私]のものではない[ためらい]が、[好きだよ]が現出する。とはいえ、[夏]がその[扉を開け]ることとは、[ためらい]や[好きだよ]の語句を囲う括弧を削除し、滑舌よくこれを流暢に発話することではない。そうした理想的な[綺麗]さは、これを目指して歩を進めるごとにその実現から遠ざかっていくだろう。そうではなく、それは[私]に帰属しない語句を発話することの居心地の悪さを受け容れることである。もし仮に、歌詞の言葉の語り手たる[私]の差配に従順に応じるわけではない語句を操作するにあたって、その異物感を、摩擦や軋轢を率直に引き受けるならば、それらの語句からは括弧が自ずと脱落し、[夏]はその[扉を開け]る。

[私]以外のなにかが、魔物が、[あなた]が、[私]のうちに組み込まれ、浸透してくること。吃りとは、閉じられた[扉]の奥、その[向こう]に潜在する魔界、測り知れない外部との邂逅の兆候である。摩擦や軋轢をとまなうこの接触を恐れるあまり、["好きだよ"]のフレーズを[まさか嘘でしょう]と冷たくあしらい、[どうかしているわ]と受け流すだけの[私]に対して、[夏]がその[扉]を[開]けることはない。吃りのすえに自分の言葉をことごとく喪失し、その言表行為が機能不全に陥ろうとも、[私をどこか連れて行って]もらうそのためには、[私]は摩擦や軋轢に自身を晒し、吃り続けるよりほかない。こうした意味では、[フレッシュ!フレッシュ!フレッシュ!]の祓詞とは、まさしく吃りそのものであるだろう。再三にわたる[フレッシュ]の一語の繰り返しや[!]の使用が、この祓詞の歌唱において吃音の性質を強調することはいうまでもない。

1-2-3. <白いパラソル>

そのデビュー曲以来、アイドル歌手としての松田聖子の存在性が帯びていくべき色合いの方向性を設定し、その着色の次第に深く関与してきた三浦徳子は、松田聖子のシングル曲の作詞家としての職責を全うするにあたって、彼女の言葉に具合よく染まりつつあったこの女性アイドル歌手の存在性を、ほかでもない歌詞の言葉をもっていったん生成りの状態へと還元し、次の作詞家の手に委ねた。この役割りを引き継いだ後任者にとっては、今度は彼の言葉をもって彼女の存在性を象り、表現していくための媒体としてあらかじめ適切に初期化されていたことが、〈白いパラソル〉を端緒とする彼女との協働をどれほどか潤滑に開始させたであろうことは想像するに難くない。前任者のそうした慎ましい配慮に応じて、松本隆もまた、彼女の作

詞家となることの意義を確認するかのように、ある倫理的な態度をもって〈白いパラソル〉の歌詞の言葉を紡いでみせる。

〈白いパラソル〉の作詞家となった松本隆がそこで選択した態度とは、松田聖子との協働を〔白い〕の一語から始めることである。かつて三浦徳子は、まさに〔白い〕の一語をもって松田聖子の登場を世間に紹介した。デビュー曲となったあの〈裸足の季節〉において、彼女が歌手として最初にその声をもって実現したフレーズが、歌詞の冒頭で〔白い〕と表記される音響的な持続であった一方で、なるほど、〔お願いよ〕の語句から歌唱を開始させる〈白いパラソル〉の歌詞の言葉は、〔渚に白いパラソル〕と綴るサビの箇所ではようやくこの色彩を参照するにすぎない。さらにはこの参照に先んじて、そこでは〔青空はエメラルド〕であることがすでに言及されてさえもいる。〈青い珊瑚礁〉において〔渚〕が〔恋のモスグリーン〕に染まったとき、植物に由来するこの濃緑色が〔青〕さにおける一定の質を表現したのと同じ仕方で、〔空〕の〔青〕さをめぐる質に関して、ただし今度は鉱物に由来する透いた翠玉色が註釈を挿入し、その色彩を装飾するだろう。いずれにせよ、松本隆は、松田聖子とののはじめての協働となるこの楽曲において、〔白い〕の一語を歌詞の言葉の発端としたわけではないのである。

にもかかわらず、彼は、あくまでも〔白い〕の一語によってその協働を始めなければならなかった。この〔白〕さは、〈裸足の季節〉において歌手としての松田聖子の産声となって響いたものである。その〔白〕さのうえにさらなる歌詞の言葉をもって堆積させてきた色彩の地層を、〈夏の扉〉の三浦徳子は〔裸〕の、生来の、生成りの状態にまでひとまず掘り返し、更地に戻ったこのアイドル歌手の存在性を次なる責任者に譲渡した。更地へと還元された松田聖子の存在性に対して、今度はどのような色彩をどのような調子で施していくのか。既知の、既成の彼女の存在性を、堆積した地層に記録されたその歴史を無下にすることなく、それでもなお新しい松田聖子のありようを象り、社会に対して新しい松田聖子の誕生を印象づけるそのために、〔裸〕の、生来の、生成りの彼女は、ここでまたしても〔白〕く塗られる。

ただし松田聖子の存在性がふたたび纏うこの〔白〕さは、もはや音響的な持続をもってあらためて世間に告知される必要はない。というのも、すでに松田聖子のものとして流通しているその歌声とは、まぎれもなく歌手としての彼女の存在性そのものであるからだ。「松田聖子は(…)なにしろ、史上初めて、顔ではなく声が先に認識されたアイドル歌手だった」¹²。その歌声を脱色し、漂白することは、既知の、既成の彼女の存在性を、堆積した地層に記録されたその歴史を無効化しかねない忌避すべき行為である。そうではなく、文字によって〔白〕から始めること。言語の聴覚的な側面をもって提示されたひとりの新人歌手の存在性の〔白〕さは、ここではその視覚的な側面をもって反復される。歌詞の言葉の音声による実現に先駆けて、いつまで待機しようともけっして歌唱されることのない言葉がこの楽曲には登録されている。つまり、それは〈白いパラソル〉という題名である。むしろ当の楽曲自体を登録するものでもあるだろうそこで〔白〕さを提示し、松本隆は松田聖子のための言葉を紡ぎ始める。

ところで、もし仮に、〈裸足の季節〉における〔白〕さのうえにさらなる歌詞の言葉をもって堆積してきた色彩の地層が、〈夏の扉〉によって〔裸〕の、生来の、生成りの状態にまで掘り返し、更地に戻されることのないまま、この分厚い地層群を貫くように〔白いパラソル〕が突き立てられるならば、ここに開かれた日傘は最新の地面となって地表を〔白〕く覆うにはちがいない。かつての存在性の色合いを、色彩の起伏を糊塗し、うわべだけの新鮮さを偽装するそれは、しかし素材の肌理を隠蔽して表情の細部を欠落させる厚化粧にほかならず、もつぱら表面の平板さをもってのみ自らの無垢さを強弁するものである。夜の暗闇にあつてさえ派手や

かに浮き上がると思しきこの〔白い〕地面は、たとえば<青い珊瑚礁>の〔青〕や〔モスグリーン〕といった他の色彩に相対化され、とうに素朴な純真さの微塵もない単なる一色彩として値踏みされずにはいない。分厚く堆積した地層群のなかで、他の諸層と同様の仕方でのその層の厚みにおいて一定の時代を表現するだけの〔白〕。こうして地層の一表面を〔白〕く塗りつぶされるとき、皮膚呼吸の困難な状況に陥った松田聖子の存在性が、その息苦しさに疲弊することは不可避である。

まずは今日の化粧を拭いとり、素肌に存分に呼吸させること。塗り重ねられた色彩の地層のもとで窒息するまえに、これを洗い落として空気を送り込み、剥き出しとなった粗い肌理を穏やかに休息させること。明日の化粧を施し、あらためて色彩を塗り重ねるまでに、〔フレッシュ〕の一語とともに彼女の存在性はいったん〔裸〕にまで還元された。暗闇にまぎれて新鮮な夜気に晒され、これが涵養したその素肌には、明日からはそれまでとは異なる仕方での化粧が施されるはずだ。そしてなにより、その化粧にふさわしい下地の調整が肝要となる。

松田聖子の存在性を彩り始めるにあたって、松本隆が<白いパラソル>の題名を採用したことは、それゆえいかにも適切な振る舞いであったといえる。これから彼の言葉が構築していく松田聖子の世界、それが染めていく存在性の色々。その光景を、その筆致をあとう限り有効とするために、存立平面たる素材の肌理を慎重に整地すること。運命的ですらある松田聖子との出会いをめぐって松本隆が直面した最初の課題とは、おそらくそうしたものであった。このような意味においては、財津和夫の作曲を介した<チェリーブラスサム>から<夏の扉>を経て、ついに<白いパラソル>に至る松田聖子の楽曲の遍歴、彼女の存在性の変遷は、まさに三浦徳子と松本隆の協働の成果でもあったわけだ。

暗闇にまぎれて新鮮な夜気に晒され、これが涵養した素材の肌理を、松本隆の言葉は慎重に確認する。それはこの素肌に具体的な細部を手探りし、潜在する詳細のひとつひとつを撫でるように緩やかに汲み上げていく。〔開〕いた〔夏の扉〕の〔向こう〕から飛び込んできた存在性の全体との邂逅、そのあまりの目映さに眩む瞳を惑わされつつ、言葉はその存在性のかたちを模索する。ひとつの全体として持続する松田聖子の存在性に対して、その行方を見定めたいのでこれを彼に固有の仕方でも象り、その言葉をもって染めるためには、あらかじめそのかたちが描かれるべき余白を、言葉によって埋められるべき空欄を設けなければならない。<白いパラソル>の題名が表象する〔白〕さとは、こうした記入を待つ空白のそれである。<白いパラソル>を端緒とする松田聖子との協働において、その歌詞に松本隆が綴っていく言葉とは、いわばこの空欄を埋めようとして彼女の存在性のうちに織り込まれた表情にほかならない。

言葉を書き込むための空欄、もしくは表情の襞を折り込むための存在性。事実、そうした<白いパラソル>の〔白〕さを立証する否定形の言質として、この楽曲の歌詞の言葉からは一人称代名詞が完全に脱落している。

確かに、果実も花葉も枯らして艶やかな彩りを喪失した<風は秋色>の歌詞の言葉においても、一人称代名詞の使用は同様に放棄されていた。この歌詞の言葉の語り手は、そこで〔冷たい秋〕を迎え、〔あなた〕のことを〔忘れるために〕ひとり〔海辺の街〕を〔訪れ〕てみたはずが、まるで〔あなた〕を〔忘れる〕ことは自身を失うことに等しいとでもいわんばかりに、単に“わたし”のみならずあらゆる一人称代名詞の使用を放棄してしまった。そうして忘却される“わたし”の存在とは、まぎれもなく光の透明さそのものであった。にもかかわらず、光の透明さの喪失された対価たる〔心のあざ〕の遮光性は、その不透明性が濾過した結果として、いま〔あなた〕の〔ミルキィ・スマイル〕をそこに象る。要するに、<風は秋色>の歌詞にお

ける失語症的な一人称代名詞の使用の放棄は、[あなた]にとって歌詞の言葉の語り手の存在が、“わたし”と自称させるまでもない自明のものであるどころか、これが[あなた]の存在を規定し、実現するその存立平面ないしスクリーンにほかならないことを意味した。“わたし”なくして[あなた]の存在が不可能であることへの揺るぎなき確信が、一人称代名詞の使用をこの語り手に回避させた。彼女はただ、[あなた]との再会をとおして、[冷たい秋ひとりぼっちの夕暮れ]に消え入りそうだった自分の存在性を追認したかっただけなのである。

<白いパラソル>の場合には、事情はこれとは大きく異なる。というのも、ここでは歌詞の言葉の語り手は、“わたし”についてはもちろんのこと、[あなた]についてもほとんど知るところのない白紙の状態にあるからだ。あるいはむしろ、[渚]の[白いパラソル]に表象される“わたし”の存在性は、[あなた]を[知]ることをもってそのかたちを象られ、彩られていく。[あなた]について[知]ることが“わたし”について[知]ることである以上、もっぱら彼女が[あなたを知りたい]と思ったところで無理はない。これまでの[私]を<夏の扉>のあちら側に置き去りにしてきた語り手にとっては、なによりもまず[あなた]に[お願い]することから“わたし”の存在性が始まる。そうして[正直な/気持だけ聞かせて]もらえるよう請う彼女からの問いかけに、しかし[素知らぬ顔]の彼は依然として[あやふやな人]であり続ける。この[冷たい]態度、[少し冷たい瞳]に[とても素敵だ]と惹かれる彼女は、いつそう[あなたを知りた]くならずにはいない。与えられた問いへの返答が記入されるべき空欄、それをもって埋められるべき余白は、こうして言葉を書き込まれ、髪を折り込まれ、表情を織り込まれることのないまま、その瞬間の到来を、その実現の機会を先送りされる。

いまだ[答は風の中]にある。つまり[あなた]からの[答]は、文字ではなくその音声すなわち空氣的な振動をもってあの空欄に、余白に、“わたし”の存在性を表象する[渚]の[白いパラソル]に記入されるはずである。だからおそらく、彼女にとって[あなた]に[風を切るディンギーで/さら]われることとは、彼からの[答]を[風の中]に聴くことにほかならない。[あなた]の有声の呼気が震わせた声帯に起因する空氣の振動を、[風]の髪を、その耳に、その鼓膜に刻み込むこと。したがって、[渚]に開かれた[白いパラソル]とは、ここでは[風を切]って波打ち際を滑る[ディンギー]の帆の一変奏として、[風の中]で[あなた]の[答]が叩く鼓膜となるだろう。

とはいえ、<白いパラソル>にあっては、[答]を記入するための空欄は、[白いパラソル]のフレーズをもって音響的な持続のうちに開かれることに先んじて、あくまでも文字として、題名それ自体のうちにあらかじめ提示されていた。この限りにおいて、たとえ[白いパラソル]が[渚]に広げられようとも、[髪]に挿された[ジャスミンの花]が[夏のシャワー浴び]たがごとく、[風]が運んできた[答]はその表面をさらさらと流れ去る。その存在性をもって捉え損ねた[答]が再び[風の中]へと回収される様子を、語り手は[砂時計]に譬える。存在性すなわち[心]の[白]い表面を滑り、零れ墜ちる[砂]の粒にさらに[涙]のかたちを重ね合わせる。水面を漂流する[あなた]の[答]を掬おうと波に差し出した掌から漏れる雫にちがいない[涙]、これが、[答]の捕逸と引き換えに獲得されたその代替であることはいうまでもない。それどころか、ここで[白]さと丸みを帯びた[答]の一粒ずつを[糸でつなげば/真珠の首飾り]になるとさえ、彼女は夢想する。この[真珠]は、海辺の生体が育む鉱物として[砂]の粒を[白]く彩りながら、鉱物に由来する宝飾性の耀いをもって[渚]と[エメラルド]の[青空]とを媒介するだろう。属性の機軸をわずかにずらしつつ、こうして幾重にも多重露光されていくイメージの反映と連鎖は、<白いパラソル>の歌詞の世界に複雑な髪

を折り込み、多彩な色合いをそこにもたらす。

[心は砂時計よ]と[真珠の首飾り]、さらには[答は風の中ね]のフレーズが揃って同一の旋律を共有し、それぞれの機会にこの旋律が反復されるその都度、ここでの多重露光はいつそう顕著なものとなる。そうした過程を経て、[あなた]からの[答]はついに[真珠の首飾り]へと生成しうる。あるいはむしろ、この[真珠の首飾り]のうちに[答]の潜在性は実現の可能性を担保される。いかにも細い一縷の磁力が、儂く脆い言葉を、[答]を貫いて[首飾り]とする。実際、「私たちの知覚は宇宙の生彩に富んだ画面の系列を提供してくれるが、それらは非連続的である」¹³。宇宙の生彩を瞬間ごとに捉えたこれら断面の系列を、言葉の数々を[糸でつな]ぐこと。「外部知覚における意識の理論上の役割は、現実の瞬間的な数多の観照を、記憶力の連続的な糸によって互いにつなが合わせることであろう」¹⁴。気体は液体となり、この液体を固体に変えて、イメージの潜勢力は系列化の諸線を描く。

それでもなお、<白いパラソル>において、[あなた]からの[答]がそれとして記入されることはないだろう。というのも、[風]とは、単なる囲われた空気、安定した気体ではなく、その流れ、運動、要するに不断に変化する持続であるからだ。[風]もろとも凍結させて[答]をそこに閉じ込めようと試みたところで、これが凍った瞬間にそれは[風]であることを止め、[風]とは別のなにかへと変質してしまうことは不可避である。「もし私にそれを分離させること、とりわけその外皮を分離させることができるならば、私はそれを表象にかえるであろう。表象はたしかにそこにあるのだが、いつも可能的に存在するのであって、現実化しようとする瞬間には、他のものへ連続し消失することを余儀なくされるため中和化されてしまう」¹⁵。そのとき、激む空気を対流させて[風]を孕むその萌芽として、いわば[風]とともに実現される[答]の潜在性は、これを文字のうちに移植し、顕在化することを原理的に不可能なものとする。音声は、この音響的な持続そのものが文字のうちに実現されることはないのである。

この限りにおいて、[愛]は依然として[予感]のままに留まり続ける。ここで[予感]された[愛]もまた、[答]と同様に[風の中]にあって、[あやふや]なまま宙吊りにされ、空欄への記入の機会を永遠に先送りされる。いずれ[心]に襲となって折り込まれ、[冷たいあなた]のせいで零れた[涙]の行方の次第では、ときにこれが癒しがたい傷痕となるかもしれない[愛]を[予感]しながら、<白いパラソル>の歌詞の言葉の語り手は、いつまでも底なしの[砂時計]を眺めるばかりだ。そうこうするうちに、彼女の前を通過した[風]の生起を叶える季節の潜在性はやがて尽き果て、[渚]の光景をすっかり風配と変えてしまうことも懸念されないわけではない。「現在は存在するものであるとかつてに定義されるけれども、そのじつ現在はたんに出来つつあるものにすぎない。現在の瞬間は、もし過去を未来から分かっこの不可分な境界の意味に解されるならば、これほど存在しないものはない。私たちがこの現在はあるべきだと考えるとき、それはまだありはしない。またそれは存在していると考えるときは、それはすでに過ぎ去っている」¹⁶。<風は秋色>であるどころか、とうに[風]は立ち、これとともに[答]は、[あなた]は去ってしまったのだろうか。「本当は、あらゆる知覚はすでに記憶力なのだ。純粋な現在とは未来を侵蝕する過去のとらえ難い進行なのだから、私たちは実際上過去を知覚するのみである」¹⁷。

そして[あなたを知]ることがまぎれもなく“わたし”自身について[知]ることである以上、<夏の扉>のあちら側に置き去りにされたかつての[私]のような人称性を獲得することは、この語り手にとってはいかにも困難となる。まして、こうした人称化の不能について、<風は秋色>の場合のように光の透明さをもって“わたし”の存在の自明化として居直るほどの

不遜さを、あいにく彼女は持ち合わせてもいない。

-
- ¹ アンリ・ベルクソン、『創造的進化』、松浪信三郎+高橋充昭／訳、白水社、1966、pp.28-29.
² 小倉千加子、『増補版 松田聖子論』、朝日新聞出版（朝日文庫）、2012、p.130.
³ 中川右介、『松田聖子と中森明菜』、幻冬舎、2007、p.94.
⁴ 同上。
⁵ 同書、p.96.
⁶ 同書、p.93.
⁷ 小倉、前掲書、p.209.
⁸ 堀家敬嗣、「表象としての《夕暮れ》 第1章：《夕暮れ》のアイドル—a」、『山口大学教育学部 研究論叢』（第59巻第3部）所収、山口大学教育学部、2009、p.307.
⁹ 中川、前掲書、p.195.
¹⁰ 同書、p.127.
¹¹ 同書、p.87.
¹² 同書、p.88.
¹³ アンリ・ベルクソン、『物質と記憶』、田島節夫／訳、白水社、1965、p.81.
¹⁴ 同書、p.80.
¹⁵ 同書、p.41.
¹⁶ 同書、p.169.
¹⁷ 同書、p.170.